

# 発表要旨

6月17日(土) Saturday June 17 10:00-11:30 Session 1

Room A303 Special Presentation

## コミュニケーションと文学の接点：オーラル・インタープリテーション

### Communication and Literal Arts: Oral Interpretation

司会：近江 誠（南山短期大学）  
プレゼンター：近江 誠（南山短期大学）  
川島 彪秀（日本大学）

文学とコミュニケーションの接点を探るためディスカッションを行う。その接点の一つの可能性として、コミュニケーション学の一領域であるオーラル・インタープリテーション（＝作品音声解釈表現）に焦点をおく。オーラル・インタープリテーションとは、文字化された作品を語り手の発話意図の産物やトークとして捉え、理解したように音声表現しようと格闘する過程の中で、理解力を深め、音声表現力を磨き、さらには書き手の意図が効果的に達成できているかどうかを批判・鑑賞法的に読む目を養うことなどを目指している総合的コミュニケーション訓練である。このセッションでは、この接点についての議論を交わすことにより、文学がコミュニケーション学の関連性のあり方について模索していく。

Room A401 Presentation 1 文学とテキスト Textualizing Literature

## 東野圭吾的コミュニケーション論 - 発達と声の対話とメディア考

小坂 貴志（立教大学）

平成 18 年冬、ミステリー作家東野圭吾は第 143 回直木賞を受賞した。東野は大学卒業後エンジニアとしてサラリーマンの道を歩むことになり、これと並行して創作活動に従事し、『放課後』にて第 31 回江戸川乱歩賞を受賞、脱サラの後、本格的なミステリー作家としての一步を踏み出した。ミステリーが彼の土俵ではあるが、幅広いサブジャンルを扱い、TVドラマ、映画化された作品も多い。対人コミュニケーションにその研究の場を見出すコミュニケーション研究は、ともすれば小説というジャンルを嫌う傾向にある。小説とはあくまで書であり、コミュニケーション的な発想を持って分析するにはあまりに静的なイメージ付き纏うからであろう。文学は書面言語で構成される世界であり、一方、特に初期のコミュニケーション学は発話言語が核をなすとみなしていた。ただし、文学という枠組みの中でコミュニケーションを教える現在の構造がある限り、小説を抜きにコミュニケーションを論ずることはできない。そこで、長い時を経て作家として活躍してきた東野であるが、小説のひとつのジャンルであるミステリーを舞台に何を思い、何を語ってきたのか。ミステリーというジャンルは、一作家を介していかなるメッセージを伝えようとしてきたのか。本稿では、東野の説くコミュニケーションとは何か、をテーマに、ミステリー小説を舞台にしていかにコミュニケーションが語られ、さらに作家東野の抱くコミュニケーションとは何かを探究し、小説の分野で展開されるコミュニケーションを、コミュニケーション研究の舞台へと還元しようとする試みである。社会文化的アプローチ、対話論、メディア論を参考に、東野の説くコミュニケーションと既存のコミュニケーション論との接点を考察していく。

## 文学が生まれるとき～エスペラント詩人ウィリアム・オールドの事例から

臼井 裕之（財団法人日本エスペラント学会）

1998年、エスペラントで詩を発表してきたスコットランド人ウィリアム・オールド William Auld (1926～) がノーベル文学賞に推薦され、最終選考まで残った。エスペラントについては「文学が不可能な人工語」と決め付けられることが少なくないが、そのエスペラントの詩人がノーベル文学賞の最終選考まで残りえたという事実は、エスペラントにある水準以上の文学作品が存在していることを間接的に示している。エスペラントで「文学が不可能」とされやすいのは、エスペラントが個人の考案になる計画言語であって、その背景に精神的紐帯（いわゆる文化）やこの紐帯によってまとまっている民族集団が存在していないためであろう。しかしこのような見方は、あまりにも民族集団なり文化を実体化している。特定の民族集団やその文化は、必ずしも文学に先んじて存在していると断定できない。文学創作というコミュニケーション活動をとおして、民族集団やその文化が創り出されていくという側面を看過すべきではないだろう。エスペラントが、特定の民族集団の言語ではないことは明らかである。だが、エスペラントはその発表後1世紀以上、継続的に実用に供されてきたため、そこに文化的要素の萌芽が発生し、またこの言語を中軸にまとまっている集団（エスペラント共同体）が出現してきている。このエスペラント共同体が、エスペラント文学にとって民族集団の代替として機能していると考えられる。本発表では、「エスペラントの民 *la popolo esperantista*」を自称するオールドを中心に、エスペラント文学が生まれてきた過程を考察したい。そこにはディアスポラとしてのエスペラント共同体の特殊性ばかりでなく、新たに生成される文学に共通する性格も見出されるであろう。

## 家庭を巡る「親密性」の意味 小説『空中庭園』を通して考える

池田 理知子（国際基督教大学）

どうしたら家族の成員同士のコミュニケーションをスムーズに行うことができるのだろうかとか、家庭内の危機を乗り越えるためにはどうやってコミュニケーションをとっていけばいいのかといったテーマが議論されるのが、メインストリームの「ファミリー・コミュニケーション」分野のようである。ここには、家庭とは親密な空間であらねばならない、という前提があるような気がする。いったい「親密な空間」、「親密さ」とは何なのだろうか。今回の発表では、家庭を巡って語られる「親密性」とはいったい何かを明らかにしようと試みる。その際、角田光代の小説『空中庭園』を具体的なテキストとして用い、考察する。東京郊外のニュータウンに住むある家族の姿を、家族5人とその家族に深くかかわらざるを得なくなった1人の女性ミーナの視点から描いているのが、『空中庭園』である。「何ごともつつみかくさず」をモットーとしているにもかかわらず、それぞれが秘密を抱える家族が6つの異なる視点によって浮き彫りにされている。この小説で描かれる「親密性」とは、ある一定の規範から逸脱するものではない。規範から逸脱しないようにと規律訓練されたのが、近代以降の家族の姿であるが、こうした規範をいったん括弧に入れると、どういった「親密性」の様子が浮かび上がってくるのであろうか。この作業を行う上で重要なのが、ミーナの視点である。ミーナの視点を手がかりに、親密な関係とは何かを探っていく。

Room A402 Presentation 2 発話行為 Speech in Action

言語教育は「コミュニケーション」とその「評価」をどう考えるか

## - 日本から発信する新たなコミュニケーション研究の提言 -

山中 司(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科)

鈴木 佑治(慶應義塾大学)

本発表は言語教育、特に日本の英語教育における、昨今のコミュニケーション重視の方針・政策に対し、コミュニケーションとは何か、そしてその具体的な評価はどうするべきかといった諸問題の考察を通して、日本から世界へ発信するコミュニケーション論の構築を提言するものである。1990年代以降、日本の英語教育はその至る所で「コミュニケーション重視」の方針を打ち出し、日本で英語を学ぶ環境は明らかに変わりつつある。しかしながら、英語テスト論に代表されるその手法等の膨大な研究の蓄積の一方で、肝心の「(言語教育における)コミュニケーションとは何か」といった議論、さらにはコミュニケーションにおける言語の役割、次世代のメディア環境とコミュニケーションの変容といった、中心に議論されて然るべき論点が、逆説的に周辺部に追いやられ、これらが「手垢のついていない」研究分野となってしまっている。確かに1970年代のHymesに始まる「communicative competence」を取り巻く議論はその理論的解明に一定の貢献をなしたが、理論間に合意は得られず、抽象的なモデルにとどまったまま現在に至っている。本発表は、言語哲学におけるDavidsonの論考を皮切りに、言語教育のコンテキストにおける「コミュニケーションとは何か」を議論する。Davidsonは「radical interpretation」「passing theory」「principle of charity」等、コミュニケーションを理解する際に示唆となる多くの新しい視点を提供したが、本発表ではこのDavidsonのコミュニケーション論を乗り越え、新しい日本的、アジア的な視点によるコミュニケーション論の構築を模索する。そして、とりわけ言語教育においては、「コミュニケーションの評価」の重要性を提示し、理論・実践共にその積極的な研究が行われることを提言する。

### 「アドバイス」という発話行為の本質

#### - 受け入れられなかったアドバイスの分析をもとに -

町田 佳世子(北海道東海大学)

「アドバイス」は興味深い発話行為である。日本社会では、アドバイスをすることは、送り手の側から言えば、受け手への関心や共感、仲間意識、善意を表していると考えられている(Lebra 1976 他)。そのため頻繁にまた直接的な表現で行われる傾向がある(Hinkel 1994)。ところが、受け手にとってはそのアドバイスが押し付けに思えたり、上からものを言われているように感じられ、必ずしも受け入れることができないこともある。送り手は相手のためを思ってアドバイスをし、受け手は、そのことがわかっていても、押し付けや余計なお世話と感じてしまうのはなぜだろうか。本発表は、アドバイスが受け入れられないのは、アドバイスによって伝えられる送り手・受け手の関係や内容そのものが、対人関係の維持というコミュニケーションの目的に関わる人間の基本的な欲求に、様々な側面で抵触しているからであると仮定し、受け入れられない要因を分析することにより、アドバイスという発話行為の本質を明らかにすること、また日本社会でコミュニケーションするとき私たちが抱く、対人関係維持に関わる欲求を明らかにする試みである。方法として、アドバイスをされていやな気持ちになった事例 90 余を収集し、そこで挙げられていた理由を、Spencer-Oatey (2000)の対人関係維持の4つのコンポーネントや語用論の代表的概念である power と関連づけながら考察した。「請われないアドバイス」が、「受け手側の行動の自由の妨げ」(Brown and Levinson 1987:65-66)という理由で face-threatening な発話行為であるとされる社会もある一方で、事例の分析からは、日本社会でのアドバイスは、受け手の能力・経験・行動や考えの否定と受けとめられ、受け手の送り手に対する相対的な位置づけの低下という点で不適切なものと思われている傾向が見られた。

## Conversational Repair in Native and Non-Native Interaction in Language Conversation Group

Eiko Yasui (University of Texas, Austin)

The purpose of this study is to investigate how repair occurs in interaction among native and non-native speakers in non-classroom setting. It focuses on the difference in the patterns of repair and repair initiation among non-native speakers of different language proficiency. Schegloff, Jefferson, and Sacks (1977) define conversational repair as a regular organization in conversational interaction used to deal with problems in interactants' understanding, speaking, or hearing. The present study aims at examining how the repair patterns suggested by Schegloff, Jefferson, and Sacks (1977) occur in native vs. non-native language exchange. Analyzed is the interaction between native and non-native speakers of Japanese at the Japanese-English conversation group of an American university, which provides a unique non-educational language-centered setting: (1) different from ordinary conversation, which is content-centered, it is mostly a language-centered interaction; language exchange is the participants' main purpose, (2) similar to classroom interaction, the purpose of non-native speakers there is to improve their Japanese speaking ability, and (3) different from classroom interaction, it does not focus on teaching and learning. In the conversation group, there is no distinction of institutional roles of teacher and student as seen in classroom, but institutional restriction can still apply since asymmetrical linguistic knowledge exists between native and non-native speakers or among non-native speakers with different levels of language expertise. The conversation analysis of the interaction in the conversation group, which consists of one Japanese woman, a native speaker of Japanese, and four male university students, who are non-native Japanese speakers with different levels of language proficiency, shows that different language expertise contributes to the different use in repair and repair initiation strategies. It also reveals that even in non-educational setting, similar repair patterns used in classroom conversation are seen in the language-centered interaction between native and non-native speakers as well.

### Room A403 Presentation 3 **実践の場** Professional Applications

#### **医師の説明に対する患者の理解度にコミュニケーションが与える効果**

塚原 康博 (明治大学)

現代は医師・患者関係の変革のときであり、患者中心の医療が求められている。患者中心の医療のためには、インフォームド・コンセントやインフォームド・チョイスが十分になされる必要がある。そのためには、患者が医師の説明を十分に理解していることが前提となる。そこで、本研究ではこの問題に焦点を当て、患者と医師のコミュニケーションにおいて、いかなる要因が医師の説明に対する患者の理解度に影響を与えるかを検証し、患者理解度を改善するための患者と医師のコミュニケーションのあり方を考察した。分析結果から、患者理解度の向上のためには、患者と医師の双方の努力が必要であることがわかった。患者には医師の説明への真摯な傾聴態度と治療方法や薬の副作用に関する知識の修得が求められ、医師には患者とのコミュニケーションの基本ともいえるべき病気に関する情報の十分な提示と

治療方法についてのわかりやすい説明が求められるのである。

## 職場のコミュニケーション環境と公正感の男女間認識比較

山口 生史（明治大学）

1985年5月に男女雇用機会均等法が成立してから20年を超えた。そして、採用・昇進などで男女を差別しないことを「努力目標」から「禁止する」と改正した改正男女雇用機会均等法が1997年に成立（1999年4月施行）してから約10年になる。このように働く環境は法律的には男女平等となってきた。しかし、実際の職場でのコミュニケーション環境はどうか。上司から与えられる情報量は男女間で差はないか。あるいは、自己の意見を上司などに伝える機会や方法の満足感は男女間で差はないか。そして、その違いがあるとすれば、その相違は「自分が平等に扱われているか」や「自分の人事考課が公平だろうか」という認識すなわち組織公正感の男女の違いになんらかの影響を与えていないだろうか。これらが本研究の研究課題である。まず性別と組織公正感（「平等な扱い」と「人事考課の公平性」）の関係を考察し、その関係に情報量と意見表明の機会がいかに影響しているかという理論モデルを構築する。すなわち、性別を独立変数、組織公正感を従属変数、情報量と意見表明の機会を媒介変数あるいはモデレーターとするモデルである。男女のコミュニケーション環境は、日本の文化的特徴からその平等感・公平感の認識に差があると予測される。しかし、これまでの知見として、十分な説明が与えられたり（情報量）、意見表明の機会が与えられていると、人の組織公正感が促進されることがわかっている。したがって、情報量と意見表明の機会に不公平感を感じなければ、男女の組織公正感は緩和されるか、あるいは促進されるかもしれない。また、逆に、情報量と意見表明の機会に不公平感を感じれば、男女の組織公正感阻害されるか不公平感が強くなるかもしれない。この理論モデルを作業仮説に落とし込み、この仮説検証のために2次データ分析を行う予定である。データ分析には、重回帰分析あるいはパス解析を行う予定である。

## コミュニケーションスキルの生産、分配、消費

佐藤 慎司 (コロンビア大学)

言語教育ではコミュニケーションを教えることの重要性が唱えられて久しい。例えば、全米外国語教育のスタンダードの中では5C (Communication, Cultures, Connections, Comparisons, Communities) がキーワードになっており、その中にはコミュニケーションという言葉が含まれている。ここで問題にしたいのは、このコミュニケーションをスキルとして捉える最近の動向であり、そのようなアプローチを再考するのが本発表の目的である。ある言語特定のコミュニケーションスタイル、すなわち、文化的な規範・標準は、研究者によって絶えず生み出されている。しかし、それが実際に学習者の所へ分配されるのは、研究結果を生み出す研究者によってではなく、言語教師による指導を通してである。そして、その際には教科書が用いられることが多い。そこではどの種類の文化的なコミュニケーションスキルが学習者にとって価値のあるものであるかという観点で、ある特定のコミュニケーションスタイルがスキルとして選ばれている。この意味で、コミュニケーションスキルを教えるということは、規範的效果、標準化の効果を持つ。日本語教育もその例外ではない。日本語教育において日本人のコミュニケーションに関する知識は学者によって生み出され、スキルになり日本語教師によって消費されている。本発表では実際に生み出された、日本人の積極的な聞き方 (Maynard, 1997)、また、日本人は褒められた時に謙遜をする (Barnlund & Araki, 1985) といった知識が研究者の手を離れ、どのようにスキルとして広く使用されている教科書の一つ、『なかま』(Makino, Hatasa, & Hatasa 1998)に提示されているかを分析する。この分析結果にも見られるように言語教師はつねにどのようなスキルのどのバージョンを選ぶかと言った選択に迫られており、こういった政治的課題を避けることはできない。したがって、こういった固定化されたコミュニケーションスキルや文化といった記述にどう批判的にかかわっていったらよいかということを実際に考える必要がある。

**6月17日(土) Saturday June 17 13:00-14:30 Session 2**

Room A303 Panel 1 コミュニケーション教育研究会企画パネル

### 「公共哲学とコミュニケーション教育の接点を探る」

司会・討論：松本 茂 (立教大学)

ゲストスピーカー：山脇 直司 (東京大学)

指定討論者：青沼 智 (神田外語大学)

これまでコミュニケーション教育(教育におけるコミュニケーションを含む)に関する哲学的・理念的討議があまりに少なかったという認識に基づき、CAJ コミュニケーション教育研究会はコミュニケーション教育が立脚すべき理念・哲学・理論について、コミュニケーション学および隣接する学問分野の専門家との対話によって模索しております。各担当講師の経験則に基づいて無批判に話し上手・聞き上手を育てていくということの繰り返しを省察し、理念的・哲学的・理論的な基盤作りを目指しております。今回は、公共哲学の第一人者の山脇直司氏をお迎えし、公共の概念、公共哲学が目指しているものなどについて語っていただいた後に、フロアーの方々、そして指定討論者とともに、「公共性」「パブリック」という視点から公共哲学とコミュニケーション教育との接点を探りたいと思います。大学で

Public Speaking を教えている方に public をどうとらえたらよいか、といったことを考えていただくきっかけにもなると思います。

## Room A401    Presentation 4    **メディア**    Media and Context

### **Emotional appeals in print communication and attitude change**

Worawan Ongkrutraksa (Chulalongkorn University)

This study pioneers an in-depth analysis of environmental communication (specifically on advertisement) and audience behavior in Japan. It develops field experimentation based upon communication theory and empirical research about the emotional-appeal effects of environmental advertising. Under this study, an experiment using a large color images is proposed to examine the behavioral effects of fear appeal, warmth appeal, well-baby and combination appeal on individual subjects. A validation test for an experiment is also conducted to verify such propositions by including measures that are delayed up to four weeks after the subjects have been exposed to controlled environmental advertisements. Towards the applications, the experiment is useful for establishing and determining which combinations of emotional appeals in verbal messages and visual imagery would yield the highest impacts on attitudes towards environmental problem, intents, and behavior of consumers over time. The empirical results provide evidence that using fear appeal can be a highly persuasive technique in certain situations, or damaging in others. Fear does influence the unfamiliar environmental awareness and interest in green ad more than warmth and well baby appeal. However, fear appeal creates less positive attitude on environmental ad (build corporate image) than strong warmth appeal.

### **小学生といわゆる「若者言葉」**

福原 裕一（東北大学大学院国際文化研究科）

米川（1996）は若者言葉の定義を「中学生から三十歳前後の若い男女が仲間内で娯楽・会話促進・連帯・イメージ伝達・隠蔽・緩衝・浄化などのために使う言葉」と主張するが、これよりも低学年の間で、いわゆる「若者言葉」が使用されることはないのであろうか。この若者言葉の定義は1996年に主張されたもので、今から10年も前のものである。最近では小学校女子児童をターゲットにしたファッション紙が出版されており、その中では周囲や気になる異性に好印象を与えるおしゃれの特集や、恋愛について扱った記事も多い。このようなメディアに接する小学生は、早いうちから自分が周囲にどのように思われているかを気にしたり、流行に後れないように努力するなど仲間意識にも敏感かもしれない。また、これらのメディアにはいわゆる「若者言葉」が多用されており、前述の仲間意識も手伝って、早いうちから若者言葉を使用することが容易に示唆できる。そこで、本研究はいわゆる「若者言葉」が小学生の間でどの程度使用されているかを確認し、これら若者言葉の使用者を取り巻くメディアとの相関関係を明らかにする。また、面子行動の観点から小学生がポライトネスを意識し、コミュニケーションにおいて若者言葉を使用するのも明らかにしたい。今回の調査の対象は、小学校1年生から6年生までの男女、20人程度を予定している。よく読む雑誌や見るテレビ番組、若者言葉を使用する理由などについてアンケート調査を行う。その後実際の会話なども録音し、面子行動の観点から小学生のポライトネス意識についても考察したい。小学生の使用する「若者言葉」が対人コミュニケーションにおいてどのよう

な役割を果たすのかを明らかにする研究自体は少なく、若者言葉の定義を見直し、現代の若者言葉研究に貢献できると考えられる。

## 都市社会とコミュニケーション：文化と社会構造の観点から

丸山 真純（長崎大学）

現代は都市社会である。この都市は近代的現象であるといえる。この「近代」は、コミュニケーションを研究する者のみならず、およそ人間や社会を研究する者にとって重要である。というのは、洋の東西を問わず、現代に暮らす者は、その多くが近代に規定され、影響を受けているといえるからである。そのインパクトは、私たちの意識や行動様式、価値規範、コミュニケーション、そして学問的枠組みなど、広範囲にわたっている。近代は多面的な側面をもつが、本論文では、近代化＝産業化＝都市化＝個人（主義）化の枠組みを用いながら、とりわけ、都市に着目して、近代の理解を深めたい。そして、都市とコミュニケーションの関わりを考えたい。より具体的には、以下の点に的を絞りながら、考察したい。第一は、現代のグローバル化を近代都市社会の視点から理解を試みることである。現代社会は、端的には、都市社会であり、都市的生活様式がグローバルなレベルで浸透している。このプロセスを、まずヨーロッパ近代の成立の歴史から概観したあと、同様のプロセスが、特に高度経済成長期の日本に起こったことを確認したい。そして、今日のグローバル化を理解する一助としたい。第二は、文化と社会構造・制度の融和の必要性を考察することである。文化研究は、概して、個別性とその永続性を前提としており、普遍性や歴史性を過少視している。一方、社会構造・制度の研究は、「近代社会」研究として、普遍性と変容に焦点を当てる傾向がある。われわれの生活様式は、他の文化社会と異なっていると側面と、共通性を持った側面の両方を併せ持っているといえる。つまり、個別性と普遍性・変容の両方の観点を視野に入れて考察をする必要がある。第三に、近代を日本の文脈の中でどのように理解できるか考察することである。とりわけ、コミュニケーションにどのような示唆を与えるかを考察する。その中で、都市社会と「日本的」コミュニケーションのはざまという観点からアプローチする。具体的には、ウチとソトの区別と都市的生活の関係性を考察することから、コミュニケーションの問題を考えてみたい。もし可能であれば、学校教育の観点から、個別性と普遍性の問題についても言及したい。

Room A402    Presentation 5    異文化    Intercultural Contact

### American Sojourner Perceptions on Acculturation: Conflicts and Resolution

Adam Komisarof (Reitaku University)

One Japanese government-proposed method of counteracting the growing imbalance between the nation's workforce and the retired population is to increase the number of skilled foreign workers. However, importing such labor is not a panacea. Japan will need not only to physically accommodate these new workers, but also ensure their smooth acculturation into society and the organizations where they work. The central goal of this presentation is to facilitate this process by focusing upon the acculturation of one group of non-Japanese skilled laborers which has grown continually over the past three decades: Assistant Language Teachers (or "ALTs") employed in Japanese schools under the sponsorship of the Japanese government's JET Program. ALT acculturation attitudes, as well as those perceived by ALTs among their colleagues, are differentiated according to Berry's model, and the impact of the alignments of those attitudes

upon acculturative outcomes involving American ALTs and Japanese coworkers summarized. During the research process, two sets of acculturation attitude alignments were most frequently observed, which led to the construction of corresponding profiles of acculturation outcomes: Intercultural Synergy, entailing a complementary alignment of acculturation attitudes, and Alienation, which constituted a clash between such attitudes resulting in conflict. Intercultural Synergy is posited as a potential model for intercultural collegial relations-one in which Americans and Japanese negotiate an active professional and social role for the sojourner, leading to a mutually comfortable degree of inclusion. In order to facilitate such conditions, the Hampden-Turner/Trompenaars method of conflict resolution is employed to identify underlying value clashes endemic to the Alienation profile, and also to form behavioral and policy recommendations for bridging gaps in discordant acculturation orientations between ALTs and Japanese teachers which would promulgate Intercultural Synergy.

### 日中韓三カ国の大学生の家庭観に関する比較研究 - 主に「孝」という視点から -

中林 眞佐男 (元関西外国語大学短期大学部)

長谷川 由美 (高麗大学・大学院)

楊 奕 (関西外国語大学)

現代社会は、価値の多様化、多元化の社会と言われている。その多様化は、過去の価値観の後退とも言えるが、その状況は、家庭生活において、どのように反映されているのか。本発表では、日本、中国、韓国三カ国の大学生を対象にして、行われたアンケート調査に基づき、現代青年の家庭観、主に「孝」について、どのように考えているのかを明らかにすることを目的としたい。被験者は日本人(162名)・中国人(100名)・韓国人(102名)、合計364名であった。孔子を代表とする儒教思想は、中国だけではなく、日本、韓国にも大きな影響を及ぼしたことはいうまでもない。儒教精神をよく表すものとして、「孝」をあげることができる。孔子のいう「孝」とは、人間のあり方の基本であって、子どもが親に対する敬愛の気持ちである。孝は社会を支える基本的徳として、または、人々の守るべき道として、高く評価され続けている。しかし、新思想、新理念が盛んに取り入れられ、伝統的なものが捨てられつつある現代社会において、この「孝」の精神は、どのような状況にあるのか。儒教に基づき語られてきた孝は、今日でも儒教だけで解釈することができるのか。もし儒教によって説明しきれない状況であると捉えられるなら、現代社会は、「孝」にどのような新たな意味合いを賦与し、社会に相応しい新しい孝の理念を作り出しているのか。この問題意識の下で、本発表は、次の三つの側面から論を進めていきたい。まず、三カ国大学生の「孝」の実態を把握し、データの分析から、その共通点と相違点を指摘する。次に、なぜそのような相違が生じるのか、三カ国における、孝をめぐる歴史的変遷について見てみる。最後に、現代社会の「孝」の意味について考え、現代青年の家庭観、主に「孝」について、どのように考えているのかを明らかにしたい。

## 外国語学習と異文化受容：大学生の意識調査

桜木 俊行 (Gustavus Adolphus College)

異文化コミュニケーションという概念、さらに学問分野としての認識が大学教育関係者の間に浸透したことを示す一例に、様々な大学がインターネット上等で掲げる外国語教育の目標が挙げられる。具体的には、「読む・書く・聞く・話すの四技能」として表現される実践的コミュニケーション能力の養成のみを外国語教育の目標として掲げる教育機関はわずかで、大多数が「異文化理解」(あるいは「他民族・多文化の理解」等)や「地球的視野」(あるいは「国際的視野」「世界的視野」「人類的視野」等)を育むことを目標として掲げている。多く大学の掲げるこのような外国語教育の目標を背景に、本研究では日本人大学生が実際に外国語学習および異文化関係に対してどのような態度を持っているかを調査した。外国語学習に関する態度の種類としては外国語教育一般に対する態度、特定の言語(英語、スペイン語、韓国語、中国語)の学習に対する態度、外国語の学習目的に関する態度を調査し、これらと異文化関係に対する態度(「社会的距離」と「世界的志向」と)の関係を調べた。さらに、この日本人大学生のデータを最近報告されたアメリカ人学生のデータ(Sakuragi, 2006)と比較分析した結果、外国語学習に対する態度と異文化関係に対する態度の関係については類似性が認められた反面、異文化関係に対する態度の水準自体に関しては日米に差異が認められた。具体的には、日本人学生の方が世界志向(世界的視野で物を考える傾向)が強い反面、社会的距離(人種?文化的背景が異なる人を実際に自分の人間関係内に受け入れる度合い)に関してはアメリカ人学生の方が異文化受容度が高いことを示す結果が出た。

Room A403    Presentation 6    文化差の再配置    Re-locating Culture

### 自尊感情の文化差とその弁明方略への影響 ~文化相反仮説の検証~

島田 拓司(天理大学)

日本人とアメリカ人の自尊感情(Self-Esteem)の高さを比較した場合、日本人の得点分布はほぼ正規曲線を描くのに、アメリカ人のものは負に歪んだ分布を示し、平均値は尺度の中央値よりもかなり高いことが明らかになっている。アメリカでは自己評価の高さが精神的健康と結びつき、高い自尊感情を維持することが望ましいとされるが、日本では自尊心の高さがプライドの高さやうぬぼれなどの否定的評価と結びつくことがあり、必ずしも高いことが望ましいわけではない。自尊感情のコミュニケーション行動への影響は、自己高揚、自己卑下、自己向上などの傾向に現出するが、西洋社会では普遍的だと考えられていた自己高揚傾向が日本人や他の東洋人の間には見られず、自己卑下あるいは自己向上傾向が認められるという指摘もある。この点に関連して、タフォルディとスワン(1995)は、自尊感情を単一の構成概念としてではなく、「自己有能性」と「自己好意性」という高い相関性を持つものの、二つの独自次元を持つ概念としてとらえ直し、西洋社会では自己有能性が重視されるために自己好意性の側面が抑制され、東洋では自己好意性が重視されるために自己有能性が東洋では自己好意性が重視されるために自己有能性が抑制されるという文化相反仮説(Cultural trade-off hypothesis)を構想し、東西文化間で異なる自尊感情についての説明を試みている。本研究では、この仮説を検証すると同時に、この仮説のコミュニケーション行動への影響について、自尊感情の維持と関わりが深い弁明方略(譲歩、弁解、正当化、拒否)を採り上げて検証した。日本人学生195名とアメリカ人学生201名から得たデータを共分散分析した結果、文化相反仮説は部分的に支持された。また、共分散構造分析を使って自尊感情(自己

有能性 vs. 自己好意性)と弁明方略との関係を分析した結果、自己有能性と自己好意性が弁明方略に日米間で異なった影響を与える可能性を示唆する結果が得られた。

## 周縁化されたコミュニケーション： 『お蔭様』をキーワードとしたコミュニケーションの探求

坂井 二郎 (千葉大学)

コミュニケーション研究において、それがそのレベルやコンテクストに関係なく、コミュニケーションは主体的で意識的な活動であるという前提が存在することが多い。しかし、実際のコミュニケーション活動では、他人に自分の代弁をしてもらおうとか、知らずに自分の感情が察知されるなど、自分が主体にならず発生する場合も多い。こういった非主体的で、無意識的なコミュニケーション活動は、ある意味、主体的で意識的なコミュニケーションに周縁化され蔭で存在している。こういった『蔭』の存在を日本では古来より『お蔭様』として敬い直感的に理解してきた。本論では、この周縁化された存在としての『お蔭様』をコミュニケーション研究にリンクさせ、その際に浮上してくる事象と領域を現象学的態度で探求していくことが主な目的である。「お蔭様」をキーワードとしたコミュニケーションプロセスの理解は、今まで無自覚に周縁化してきたものとの繋がりの感覚を養い、日向と日陰を統合した包括的なコミュニケーション活動に開かれていくことでもある。また、『お蔭様』をキーワードとしてコミュニケーション活動に再接触していく時、コミュニケーション研究において周縁化されてきた様々なコミュニケーション現象を再利用、すなわち『リサイクル』していくことにも繋がっていく。本論の探求過程では、まず、コミュニケーション研究の多くに共通する暗黙の前提を提示し、その上で『お蔭様』をキーワードとしたコミュニケーション研究の意義と位置づけを行う。その上で、お蔭様という言葉が意味するものを、語源、類似語との比較などを考慮し、その実態に接近していく。その後、お蔭様をキーワードとした時に浮上してくるコミュニケーション現象とその領域、そしてそのコミュニケーションプロセスの性質を検証する。その際、関連領域のプロセス指向心理学と生態心理学の理論を提示し、これからのコミュニケーション研究に与える影響を概観する。最後にお蔭様をキーワードとした時のコミュニケーション教育とその意義について述べる。

## 議論の構造的差異についてのモデル検証

鈴木 志のぶ (北海道大学)

日本人の議論は「あいまい」「間接的」「独特の論理による」など様々に語られてきたが、それらは実際どのような構造上の特徴を持ち、それらの特徴はどのような要因によって説明されるかという点についての研究は少ない。この研究では、ともすれば印象に基づいて語られがちである日本人の議論の構造を客観的方法で明らかにする。同時に、議論構造の違いについて包括的な説明の枠組みを提案し、理論的にも意義のある研究を目指す。そのため、対人・異文化コミュニケーションの知見に基づき、議論の構造的差異を説明するモデルを提案する。それにより、独立・協調的自己観 (Markus & Kitayama, 1991) 議論志向度 (Infante & Rancer, 1982) ・議論のテーマへの関心 議論の構造的特徴、という関係を予測し検証する。研究方法は、二つの異なるテーマについての議論の記述と、三つの測定尺度を含む質問紙を用いた日本人大学生へのサーベイである (回答者数428)。記述された議論はSuzuki (2005) のコーディング規則を用いてコード化され、次にそれらの議論の構造分析が行われた。予測された通り、独立・協調的自己観と議論志向度との間には有意な相関が見られた。また、議論のテーマへの関心が高いほど、「垂直的理由付けのミクロ構造」を議論で多用する傾向が示された。一方、議論志向度が高い

ほど、「水平的説明のミクロ構造」、「マクロ構造-水平・垂直」の垂直的構造、「マクロ構造-帰納・演繹」の演繹的構造をそれぞれ多用する傾向が示された。これらの研究結果により、日本人の議論構造は西洋的議論の構造と比べて特に異質とは考えられないこと、議論構造の傾向を説明する上で、議論志向度は有力な要因の一つであること、また、議論のテーマへの関心は垂直的理由付けの構造を形成する上で重要な要因であること、等が示唆される。これらを理論的に整理し、異文化コミュニケーション研究での議論構造研究の今後の方向を考察する。

**6月18日(日) Sunday June 18 9:00-10:30 Session 3**

Room A303 Panel 2 **関西支部企画パネル**

**「地域活性化に果たすコミュニケーションの役割 - 現状と展望 - 」**

司会：守崎 誠一（神戸市外国語大学）

パネリスト：中林 眞佐男（元関西外国語大学短期大学部）

宮本 節子（兵庫県立大学）

水野 真木子（千里金蘭大学）

かつての日本は「村社会」と呼ばれたが、そこには伝統的な行事としての神事や祭りがあった。現在それらは、これまでの「伝統的・宗教的祭り」だけでなく、「脱伝統的・脱宗教的祭り」や、最近では「創造的・脱宗教的祭り」へとかたちを変えながら存在し続けている。いずれの場合でも、開催に際して地域での意見交換や連絡は不可欠であり、開催当事者と参加者・参加グループ同士のコミュニケーションは、地域コミュニケーションの重要な場となっている。中林は、「祭りの観光化と地域コミュニケーション」と題して、伝統的な祭りと行政指導型の祭りの対比から、地域コミュニケーションに果たす祭りの役割について報告する。これに対して、過疎化や少子化などにより、地域コミュニケーションに問題を抱える地方自治体は少なくなく、そのような地域ではまちづくりなどの課題を前に、住民活力の源となるコミュニケーションをいかに創出するかが、大きな課題となっている。そのような具体例として、宮本は「ケーブルテレビが紡ぐ地域コミュニケーション」と題して、兵庫県下の市町における住民間のコミュニケーションが、ケーブルTVを介してどのように活性化していったか、行政担当者とまちの人々に対するアンケートおよび聞き取り調査に基づき報告する。最後に、近年になって新たな地域コミュニケーションの場として注目され始めている「大学」を取り上げる。かつての大学は、在校生に対する教育サービスの提供だけがその使命として認識されていたが、現在では地域コミュニティへの貢献に対する期待が日増しに高まりつつある。水野は「地域での大学の役割」と題して、そのような期待に応えようとする具体的な例として、大阪府吹田市と提携関係を結び、相互の知的・人的交流を通して地域社会と共生する大学を目指している千里金蘭大学を取り上げ、地域コミュニケーションに対する大学が果たす役割について報告する。「公共哲学とコミュニケーション教育の接点を探る」

Room A401 Presentation 7 **文化翻訳 Translation as Culture**

**長崎通詞の在り方から考える通訳者のマージナル性についてー  
阿蘭陀通詞の歴史的貢献を中心として**

江戸時代に存在した長崎通詞のうち特に阿蘭陀通詞に注目し、彼等が果たした歴史的貢献を再評価すると同時に、コミュニケーションの仲介人であるが故のマージナル性を、その立場、職分、アイデンティティといった角度から考察する。鎖国に伴い、当時のいわゆるフリーランス通訳者は解体し、幕府による新しい通訳者制度、すなわち長崎通詞が誕生した。通詞は地役人、つまり地方公務員の身分で、世襲制として代々男子に伝承された。阿蘭陀通詞（以下、通詞とする）の活躍は通訳者としての任務にとどまらず、江戸時代における外国語教育、文法書・辞書の編纂、蘭学や阿蘭陀医学の発展に大きく貢献している。アメリカで教育を受け帰国した中濱万次郎は一般にも知られているが、その他にも、黒船来航時にペリーとの交渉に関わった森山栄之助や堀達之助など、歴史の裏舞台で活躍した通詞が数多くいた。また、阿蘭陀医学の普及に貢献した吉雄耕牛、言語学者に転向した中野柳保、その英知と才能をみこまれ幕臣にまで出世した馬場佐十郎など、当時の学問や教育の発展に優秀な通詞の存在は不可欠であった。一方で、外国人との交渉に携わる通詞の中には、歴史的イベントとの関わりで罪を問われる者もであるなど、仲介人としての立場の危うさもあったようである。通詞は海外からの新しい知識や学術に接し、常に最新の情報を得る知識人であると同時に、人と人とのコミュニケーションの仲介人としての使命を持つ職業人でもあった。通訳者としての立場につきまとうマージナル性について考えてみたい。

## コミュニケーション教育における外国語科の役割      パラダイムシフトのための試案

海谷 千波（獨協大学大学院）

「なぜ英語が必要なのか」。「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」を進める文部科学省は、グローバル化社会を生き抜くためには英語のコミュニケーション能力が重要であると主張する。この意味においては、学校教育における外国語科の果たす役割が大きいことは明白である。しかしながら、「英語が使える」ことを掲げた教育目標自体は上記の「構想」ができる以前からあったはずである。その目標達成のために開発された教育の効果がでていないとすれば、その教育方法そのものを追及しても、問題を根本から解決することは難しいのではなかろうか。そこで本研究の目的は、コミュニケーション領域の視座から、日本の外国語教育課程を批評することとし、以下の3つに研究課題を設定する。第1の目標は、『学習指導要領』における「外国語」を批判的に解説することである。「コミュニケーション」という術語の扱い方・捉え方の問題点を記述する。第2は、[第1目標の記述を前提に]日本の外国語教育の背景を分析することである。今後の外国語教育課程を開発するためにも、歴史的に構築されたコンテクストを分析することは非常に重要であると考えられる。そして第3の目標は、今後の目指すべき外国語科の方向を試案として提示することである。授業研究等が直面する問題点を改善するために、「外国語科」の位置づけを変えることが必要だと考えられる。以上の点から、本研究が今後のコミュニケーション研究・教育や外国語教育に新たな視座を与えることを期待したい。

Room A402      Presentation 8      コミュニケーション教育方法論      Communicative Pedagogy

## 多地点間 e-learning 環境を利用した非言語コミュニケーション教育の試み

野澤 和典（立命館大学）

大学における e-learning 環境の充実と共に、専用回線を使ったテレビ会議やインターネット、サテライト教室などを統合して利用する多地点間における遠隔講義や言語情報コミュニケーションが可能になってきている。2003 年度より、本学大学院言語教育情報研究科の新設と共に、京都、大阪、滋賀の 3 キャンパスを結んで、主として夜間の遠隔講義がされてきており、筆者も言語情報学 IV という科目で当初から積極的に利用してきていた。2005 年度後期から異文化コミュニケーション II という科目の新たな担当で、内容を非言語コミュニケーションの理解に絞って、既存の遠隔講義システムと、Moodle というフリーのオープン・ソースのソフトウェア・パッケージ（教育的な目的で開発された CMS - Course Management System）でオンライン・サイトを構築し、言語情報コミュニケーション活動をするスタイルでの教育実践をした。本発表は、その実践内容の概要を述べると共に、利点、弱点、成果、今後の課題について報告する。

## ラカンの視点を応用したコミュニケーション教育の方法論を考える

北本 晃治（帝塚山大学）

コミュニケーション教育についての研究では、個々人のコミュニケーション能力を高めることを目的として、様々な方法論が現在までに展開されてきているが、人間存在とコミュニケーションの本質的関係性を掘り下げて考えていくと、コミュニケーション能力がどのような要素からなり、それぞれがいかなる重要性を内包したものであるのかを決定するのは、容易なことではない。これまでの研究では、コミュニケーションの技術的側面と認知的側面が取り上げられる場合が多く、後者には、文化やコミュニケーションについての様々な知識についてのものに加えて、社会一般や自己の認識のあり方自身を問い直し、新たな共通認識や、自他の関係性に開かれた自己構築の場を創出することの重要性を説くものも含まれている。筆者は基本的にこのような立場を支持するものであるが、一般の大学生に、社会的認識や自己の認知プロセスを再認識する必然性や、その動機を持たせることは容易くはなく、その為には、教育方法上の様々な工夫が必要であるように思われる。そしてそれらの工夫の最大公約数となるのは、コミュニケーション能力の一つの要素であり、その根幹とも考えられる「精神的活動能力」を十分に活性化することであろう。そこで、本研究では、人間の精神的活動を考える上で、きわめて有益な示唆に富んでいると思われるラカンの「想像界」「象徴界」「現実界」という概念を用いて、人間の内面的コミュニケーションプロセスの本質部分を捉え、それらを基礎として、今後のコミュニケーション教育において極めて重要であると思われる「精神的活動能力」を高めるための教育方法について考察する。

## コミュニケーション教育方法の一提案

小林 輝美（東京工業大学大学院社会理工学研究科）

2006 年 2 月、中央教育審議会は次期学習指導要領の教育内容の基本的な考え方のひとつとして「言葉」と「体験」を重視することを発表した。「言葉は思考力や感受性を支え、知的活動、感性・情緒、コミュニケーション能力の基盤となる」ため、すべての教育活動を通じて国語力の育成を重視するとしている。しかし、現在の子供たちに育成したいコミュニケーション能力とは何かを考える際、言葉そのものの教育を捉えることのみでは不十分であると感じる。そこで本研究では、言葉以外の部分にも焦点を当てたコミュニケーション教育の方法を提案することとする。言葉や言語は、他者の存在があって初めて成立することから、コミュニケーション教育を行う際は他者を意識させることが重要なのではないかと考え、ビデオを用いた研究を行った。研究対象は埼玉県内の 3 つの公立小学校であり、英語活動の授業を

撮影し、無編集のビデオを担任教師と共に見てもらった。研究期間は2005年5月から2006年3月の約1年間であり、参与観察、インタビュー、アンケートを用いてデータを収集した。結果として、児童は英語そのものだけでなく、自分自身や他者の行動もよく見ていることがわかった。さまざまな人を見て比較し、その差異によって学習し、アイデンティティを構築すると思われる。ビデオ視聴後、授業中にふざけるのをやめた、積極的に参加するようになったなどの行動の変容が見られたことから、児童はビデオを通じて英語を学習するだけでなく、人間関係的知能、内省的知能を身に付けていると言える。この研究により、ビデオを視聴することで、自分自身を他者として客観的に見ることができ、他者を比較することができることから、ビデオ視聴が他者を意識させるために有効であり、コミュニケーション教育の一手段としても適用可能であることが明らかとなった。

**6月18日(日) Sunday June 18 13:00-16:20 Sessions 4 & 5**

Room A303 **桜美林大学企画シンポジウム** Obirin Symposium

### 日本におけるコミュニケーション教育の可能性を探る

司会： 穂田 照子 (桜美林大学)

シンポジスト： Justin Charlebois (名古屋文理大学)

三森 ゆりか (つくば言語技術教育研究所)

Joseph Shaules (立教大学)

中村敦雄 (群馬大学)

本セッションは、日本語での自己表現力の育成を目的とした「口語表現法」の実践教育に関する発表、および「日本におけるコミュニケーション教育の可能性を探る」と題したシンポジウムから成る。

1:00PM 2:00PM

「口語表現法」と桜美林大学 - 16年の成果と課題

近年、多くの大学で、基礎的・実践的な日本語でのコミュニケーション能力を養成するためのプログラムが実施されるようになってきた。この要因としては大学機構の変化、大学生の日本語力の低下、自己表現力の重視などが考えられるが、こうしたプログラムは「日本語表現法」「口語表現法」「文章表現法」「言語表現」など大学によって異なる名称で呼ばれている。桜美林大学は1989年にすでに「口語表現法」の講座を開設し、この分野ではパイオニア的存在である。授業の特徴としては、次の2つが挙げられる。一つは、スピーチをするのも、級友のスピーチの評価をするのも、ビデオに写る自分の姿を観察し録音された自分の声を聞いて分析をするのも、すべて学生自身が行う学生主体・学生参加型であること、もう一つは、学生一人一人の上達振りが、学生自身にも教師にもはっきり実感できることである。授業の実際の運営方法を紹介しながら、16年の成果と課題について論じる。

2:00PM 4:00PM

「日本におけるコミュニケーション教育の可能性を考える」

人間にとってコミュニケーションは、「必然的」なものである。従って、人は毎日の生活を通してその地域・文化に根ざしたコミュニケーション様式を学習する。その意味でコミュニケーション能力は誰でも持っていると考えられるし、それぞれのコミュニケーション・スタイルの間には、優劣ではなく、差異だけが存在すると考えられる。しかし、現実の社会は、情報産業の発展に反比例するかのようになり、無言化の方向を辿っており、引きこもり、対人恐怖症、人間嫌い、コミュニケーション不全症候群など、さまざまなコミュニケーションがうまく取れないことに起因する問題に直面している。また、これまで

外交を含む国際舞台での日本人のコミュニケーション能力の低さもたびたび指摘されてきた。特に、平成 12 年の『学習指導要領国語』において新たに「伝え合う力」が指導目標として示されてからは、大学だけではなく、義務教育レベルでも日本人のコミュニケーション能力を問題にするようになってきた。一体コミュニケーション能力とは何か、何をもちてコミュニケーション能力の有無を決めるのか、今後日本人に求められるコミュニケーション能力とはどういったものなのか、それぞれのシンポジストが経験した国内外の教育の実態、そこに必然的に絡む自・他両文化の問題なども比較・分析しながら、日本のコミュニケーション教育における実現可能な目標と対策を模索していく。

- 1) アメリカ・ニューヨーク州における義務教育課程の言語教育、及び言語教育における日米文化差の影響 (Justin Charlebois)
- 2) 日・独の言語教育比較、及びそこから学ぶもの (三森ゆりか)
- 3) 日・米大学生の言語活動とコミュニケーション能力 (Joseph Shaules)
- 4) 日本の国語教育の歴史、および日本の国語教育改革を阻むもの (中村敦雄)

**6月18日(日) Sunday June 18 13:00-14:30 Session 4**

**Room A401 Panel 3 個人企画パネル**

### **「日本人は英語とどう付き合ってきたか～受容と抵抗のはざままで」**

司会： 臼井 裕之 (財団法人日本エスペラント学会)

パネリスト： 小林 敏宏 (拓殖大学)

吉武 正樹 (福岡教育大学)

日本人は今から約 150 年前に鎖国を解き、その近代化の歩みを始めた当初から、もっぱら英語によって近代文明を学んできたと言えるだろう。しかし、このような英語の受容は、何の抵抗もなく行われたのではない。英語が「敵性語」とされていた第二次世界大戦中は言うに及ばず、1990 年代の「英語帝国主義論争」のように英語に対する批判的な意見は存在してきたのである。また、英語に対して受容的な態度を示した人々も、まったく抵抗感なく英語を受け入れていたわけではない。日本人がなかなか英語を習得できないという現象、つまりその「英語下手」自体が、日本人の英語に対する、受容と抵抗が入り混じった態度の表れと考えることも不可能ではないだろう。本パネル・ディスカッションは、このように日本人が英語に対して両義的な態度を示すようになった要因を考察しようとするものである。そこには、近代世界において日本が置かれていた「位置」が密接に絡んでいると思われる。近代世界において日本のような後発国は、西洋列強によって植民地化されるか、植民地化を回避したければ自ら近代化することによって、西洋列強と肩を並べる必要があった。しかし多くの場合、近代化が西洋化と等価に捉えられることが少なくなかったため、それは「自己植民地化」に転化する危険性を孕んでいた。日本人の英語に対する態度がともすれば「ちぐはぐ」であるのは、このような事情がその背後にあるのではなかろうか。本パネル・ディスカッションでは以上のような観点から、近代日本において英語について言及した代表的な人物を 2、3 名取り上げ、これらの人々の「英語観」を検討するとともに、さらにわたしたち自身が、現在の地点に立って、また未来に向けて「英語問題」という近代の呪縛からどのように解放されることが可能なのか、その方途を探りたいと思う。

**Room A402 Presentation 9 政治とレトリック Politics and Rhetoric**

## 日米同盟・閣議決定・戦略的詐欺 (Strategic Deception)

### レトリックとしての弾道ミサイル防衛構想

青沼 智 (神田外語大学)

本研究の目的は、ポスト冷戦後の核時代におけるパブリック・コミュニケーションの可能性および限界を探ることにある。より具体的には、Mitchell (2001) によってなされた「[T]here is good reason to expect that the official discourse on Japanese T[hater]M[issile]D[efense] will cover up technical failure and disguise politically unpopular missions planned for any joint Japan-U.S. system」(p.94)との予見に基づき、日米安保体制の下、日本国が着手・推進する弾道ミサイル防衛計画を巡るオフィシャルな言説に見られる「戦略的詐欺 (Strategic Deception)」(Mitchell, 2000)、またそのような戦略を可能にする「閣議決定」という政治手続きが内包する根本的な問題について、レトリック論の立場より批判的考察・分析を行いたい。本研究の意図は弾道ミサイル防衛の概念そのものに対して直接的な異議を申し立てるものでもなければ、国政におけるある特定党派の主義主張を代弁するものでも無論ない。しかしながら、日本でコミュニケーション研究・教育に携わる私たちが、外交・国家安全保障政策を巡る重大な言説の批判的検証にごく一部を外いてこれまであまり積極的に関わってこなかったことに鑑み、本研究の学術的意義は小さくないと思われる。

### 装飾物としての政治レトリック カスティリオーネの「宮廷人」を中心に

平野 順也 (熊本大学)

「宮廷人」には、十六世紀はじめの文化の中心であった宮廷やそこに集まる人々の優雅な文化が美化された形で描写されており、彼の作品はエリザベス女王時代の詩人達に大きな影響を与えたとされている。「宮廷人」で描かれているのは、ある宮廷において様々な人物がゲームとして行う〈完全な宮廷人〉についての議論である。この作品は文学的な価値のみではなく、政治レトリックに関する書であるとも考えられる。議論される宮廷人に必要なエチケットやマナー、又は音楽の知識やダンスの技量は、君主に仕える宮廷人が自分の意見を君主に説得しやすくするために必要な愛顧を形成する装飾的なレトリックであり、君主に反論する際必要になるのが、それまでに装飾的なレトリックによって築き上げてきた愛顧である。ここにある姿は、命を賭けて戦い自らの信憑性を高めた騎士や、政治を戦略化しようと努めたマキャベリでもなく、便宜主義的な政治家としての宮廷人である。カスティリオーネの君主は必ずしもプラトニックな真理を知る者ではない。逆に、〈完全なる宮廷人〉が哲人王であり、洞窟に住む君主に真理を教えるのが宮廷人の仕事であるとも言える。封建社会においては、君主に権力があつたが、民主主義では民衆に力が与えられている。現代、民主主義の問題としてあげられるのが、民衆の無知さであり、パフォーマーとしての政治家の存在である。現代の宮廷人としての政治家は君主に従うのではなく、民衆に形式上従っているのであるが、実際には〈無知である〉とされる民衆に対し、どのように愛顧を形成し、自己の知を与えるかという戦略化されたレトリックが現代の政治家に認められるのではないだろうか。「宮廷人」の分析と共に、宮廷人としての政治家の姿、そして装飾的效果のために使われている政治レトリックを指摘していく。

### Rhetorical Criticism as a World-Disclosing

Junya Morooka (Kanagawa University)

This paper examines the contributions of Friedrich Nietzsche to rhetorical theory and criticism

through a close reading of *Beyond Good and Evil*, *Genealogy of Morals*, *Will to Power*, and "On Truth and Lying in an Extra-Moral Sense." In several writings and lectures on rhetoric, Nietzsche sought to rehabilitate the sophistic tradition by highlighting the evocative function of rhetoric. His conception of rhetoric as the art of evocation has important implications for the field of rhetorical studies in which Aristotle's influence continues long after the avowed rejection of neo-Aristotelianism. Drawing on Nietzsche's sophistic view of rhetoric, the paper explores the idea of rhetorical criticism as a world-disclosing critique. A world-disclosing critique is a form of criticism intended to provoke a changed perception of the social world so that its hitherto neglected pathological character becomes noticeable. A world-disclosing critique can be regarded as a rhetorical mode of inquiry because the critic uses rhetoric as a primary tool for evoking new ways of seeing the social world. The paper suggests that Nietzsche's scathing critique of metaphysics was quintessentially a world-disclosing form of rhetorical criticism insofar as he engaged the full power and force of rhetoric to unmask the arbitrary nature of reason, truth, and morality anchored in the tradition of metaphysics. The paper concludes by considering both merits and limits of a world-disclosing form of rhetorical criticism. As German philosopher Axel Honneth suggests, it is hard to provide rational justifications for a world-disclosing critique since a truth claim cannot be raised for rhetorically conveyed assertions. Nevertheless, it can be a legitimate form of criticism because certain types of social problems can be brought to the fore only by virtue of rhetorical force.

**6月18日(日) Sunday June 18 14:40-16:20 Session 5**

Room A401 Panel 4 **レトリック研究会企画パネル**

**「テキスト分析の可能性 レトリック批評からみた鍵語概念の再考」**

司会者： 青沼 智（神田外語大学）

菅野 遼（獨協大学）

松林 邦夫（獨協大学）

中西満貴典（愛知県立岡崎東高等学校）

レスポネント： 日高勝之（神戸親和女子大学）

「倫理」や「自由」といった人間の精神世界における鍵語概念、あるいは当事者どうしのあいだに存在する考え方の違いや利害衝突等の政略を説明するに当たり、一般に社会学や心理学などの諸科学に依拠する方法がある。それに対して、社会事象や人間の行動や意図をすべてテキストに還元して分析する方法もある。前者は諸現象の原因の主体を暗黙のうちに措定してしまうという危惧がみとめられ、後者はテキスト決定主義の陥穽が待ち受けている。これら主客二元論やある種の言語主義は、＜静態＞の位相における議論ゆえの限界を呈している。この問題を超越するための方途として、＜動態＞としてのコミュニケーションの次元に着目することが考えられる。われわれの行動や意図の原因をことばそのもののなかに求めるのである。つまり、ことばというシンボル・システムのなかに動機づけを求める。ことばの条件は同時に人間の条件であるという視点のもとに主体概念を正視する。ここにレトリック批評のコミュニケーション学における意義が生じると考えられる。本パネルでは、レトリックという窓から鍵語概

念を再考する視座を提示するとともに、「ことばの条件」としてのレトリック研究を論じる。

菅野は、「倫理」と「責任」の概念を再考する。R・ニクソンによるベトナム政策の演説をめぐるレトリック研究者たちの間で巻き起こった論争で解決できずに残された問題点は、原因主体を乗り越える理論を提示しようと試みるにもかかわらず、「倫理」や「責任」を語る際には常に原因主体に言及しなければならないという自己矛盾を起こしてしまう点にあることに批判的に介入する。これらの批評は、ニクソンのレトリック実践に対して予めネガティブな立場を取ってしまうことでレトリックの可能性を否定しかねないばかりか、分析者自身が自身の道德基準によって暗黙の内に「倫理」の意味を決定してしまい、道德基準や主体の同一性を再強化してしまう言説となる可能性を孕んでしまう。したがって、これからのレトリック研究における倫理批評とはどのようなものになりうるのか、その方向性を模索することとなる。

松林は、「言論」と「自由」の概念の考察をジョン・ミルトンが労作したパンフレット『アレオパジティカ』読解を通じて展開する。イソクラテスのテキストにおける自由と関わる言葉、イセーゴリア、パレーシアステースという捉え方が、いかにこのミルトンのレトリックと結びつき、また隔たっているのだろうか。その言論と自由について現代の倫理・哲学の理論にも触れつつ、この両者の相違について検討していく。そして、そこからミルトン

が詩人時代へと辿る前の、レトリック時代の可能性から再考される意義として、その宗教的背景にあるミルトンの神学的視点と世俗的視点から、本論ではその境界へと模索して批判を行なう。世俗的批判能力を持つ上で思案すべき自由と言論はどうあるべきか。その目指していくべき善き社会を考慮し、世俗的な言論と自由の概念について考察していく。

中西は、コミュニケーション研究においてケネス・バークを読む意義はどこにあるのかを問う。言い換えれば、バークの論考を再検討することによってロゴロジー概念（あるいはドラマティズム概念）の探究がコミュニケーション研究においていかなる領野をひらく可能性があるかを問う。具体的には、転義的比喩の *metaphor*、*metonymy*、*synecdoche*、*irony* の機能に関するバークの視点を検討する。それらの比喩が相互にいかに関連しあうかを考察しつつ、とくに提喩（*synecdoche*）の理解がロゴロジー概念をとらえるうえでどのように有用であるかを探る。本研究では、*A Grammar of Motives* 中の“*Four Master Tropes*”における比喩論を吟味しつつ、実際に使用されていることばの分析をマスメディアのなかで散見される鍵語を抽出することを通じて行い、ロゴロジー概念に迫る。

このパネルでは、各発表者がレトリック分析を通じて鍵語概念を展望する視点を提示する。レトリック批評が、人間のコミュニケーション経験と行動の論究を深める可能性について活発な議論が行われることを願う。

#### 1) 菅野遼（獨協大学）「迷走する「倫理」 ニクソン演説をめぐる論争に残されたもの」

本稿は、R・ニクソンによるベトナム政策の演説をめぐるレトリック研究者たちの間で巻き起こった論争に焦点を当て、その論争において充分には介入されなかった「倫理」と「責任」という概念を再考する。この論争で解決できずに残された問題点は、原因主体を乗り越える理論を提示しようと試みるにもかかわらず、「倫理」や「責任」を語る際には常に原因主体に言及しなければならないという自己矛盾を起こしてしまう点にある。これらの批評は、ニクソンのレトリック実践に対して予めネガティブな立場を取ってしまうことでレトリックの可能性を否定しかねないばかりか、分析者自身が自身の道德基準によって暗黙の内に「倫理」の意味を決定してしまい、道德基準や主体の同一性を再強化してしまう言説となる可能性を孕んでしまう。したがって、これからのレトリック研究における倫理批評とはどのようなものになりうるのか、その方向性を模索したい。

#### 2) 松林邦夫（滋賀大学）「世俗的な言論と自由に向けて ミルトン『アレオパジティカ』の考察」

ジョン・ミルトンが労作したパンフレット『アレオパジティカ』は、その各領域での評価の位置付け

はさまざまである。検閲に対して言論の自由を求める先駆者として、ジャーナリズムにおける社会派の古典的名著と掲揚されることがあれば、文学からの評価は、英詩の巨匠としての功績を残す以前の、弱冠の政治的活動期の代表作とされることもある。それぞれの観点からして、その作品の評価は、各自の領域へと帰結に至ることが多い。今回、このアレオパジティカを現代に読み起こす意義というのは、あくまでレトリック研究として領域に拘ることなく『アレオパジティカ』の評価の可能性を生み出していくことにある。実際にミルトンは、この『アレオパジティカ』というタイトルをギリシアの弁論教育者イソクラテスの『アレオスパゴス会演説』から「言論の自由」をモチーフに名付けている。そのイソクラテスのテキストにおける自由と関わる言葉、イセーゴリア、パレーシアステースという捉え方が、いかにこのミルトンのレトリックと結びつき、また隔たっているのだろうか。その言論と自由について現代の倫理・哲学の理論にも触れつつ、この両者の相違について検討していきたい。そして、そこからミルトンが詩人時代へと辿る前の、レトリック時代の可能性から再考される意義として、その宗教的背景にあるミルトンの神学的視点と世俗的視点から、本論ではその境界へと模索して批判を行なう。世俗的批判能力を持つ上で思案すべき自由と言論はどうあるべきか。その目指していくべき善き社会を考慮し、世俗的な言論と自由の概念について考察していく。

3) 中西満貴典(愛知県立岡崎東高等学校) 「提喩とロゴロジー概念 ケネス・パーク再読: “Four Master Tropes” in A Grammar of Motives 」

コミュニケーション研究においてケネス・パークを読む意義はどこにあるのか。言い換えれば、パークの論考を検討することによってロゴロジー概念(あるいはドラマティズム概念)の探究がコミュニケーション研究においていかなる領野をひらく可能性があるかを問う。具体的には、転義的比喩の Metaphor、Metonymy、Synecdoche、Irony の機能に関するパークの視点を吟味する。それらの比喩が相互にいかに関連しあうかを考察しつつ、とくに提喩(Synecdoche)概念の射程の理解がロゴロジー概念をとらえるうえでどのように有用であるかを探る。この論考を展開するためにあらためてパークの記述を批判的に再読し比喩の機能とロゴロジーとの関係について考える。本研究では、A Grammar of Motives (1969)の中での“Four Master Tropes”における比喩論を吟味する。パークは Metaphor、Metonymy 及び Synecdoche をそれぞれ “Perspective”、“Reduction”、“Representation” に置き換える。そこで、Metaphor と Metonymy との関係、及び Metonymy と Synecdoche との関係に焦点を当てて提喩概念をとらえる試みをする。実際に使用されている言葉の分析をマスメディアの中で散見される鍵語を抽出することを通じて行いロゴロジー概念に迫る。また、パーク研究を通じたレトリック批評が人間のコミュニケーション経験と行動を論究するコミュニケーション研究やコミュニケーション教育の領域においていかに役立つのかも論じたい。